

長き夜の伝説



長き夜の伝説

1

そもそもの発端は、元旦の朝の白薔薇さまロサ・キガンティアからの電話だった。

両親と一緒に山梨へ行くかどうか、決断を迫られていたときにかかってきた電話。

電話に出ると、白薔薇さまロサ・キガンティアはいつもの軽い調子で言った。

『単刀直入に聞くけど、明日と明後日のご予定は？』

「何ですか、いきなり」

『暇だったら、デートしない？』

「でえと？」

『別名、初詣ともいう』

「行きます！」

私、何も考えずに思いつきりOKした。このお誘いが夢だった。山百合会の幹部メンバーが揃っ

て初詣。もしかしたら、祥子さまの着物姿をまた拝めるかもしれない。

「で、二日ですか三日ですか？」

『両方あいてない？一泊二日の集会コースなんだけど？』

「集会？」

何だろう、集会って。

合宿、じゃなくって？

私は深く考えずにOKしてしまったけれど、本当はこの時もっと注意して聞いておくべきだったんだ。

と、反省したのはずっと後のこと。

その時の私は、

（お姉さまも一緒だといいな）

なーんてことを考えて、心の中はもうハッピー

ニューイヤード。

とてもそんな細かなことまで気が回らなかった。

*

デートと称して白薔薇さまロサ・キガンティアに連れて行かれたのは、学校に行く途中にあるあの神社だった。

二人でおみくじを引いたり。

たこ焼きや焼きトウモロコシや綿飴を食べたり。

端から見れば、本当にデートみたいに見えたかも知れない。

（お姉さま、ごめんなさい）

私は思わず、心の中で祥子さまに謝った。だっ

て白薔薇さまロサ・キガンティアとのデートは、これはこれでけっこ

う楽しかったから。

私たちはたこ焼きを食べながら、神社の裏手の雑木林と読んでもいいくら木々の茂った道を歩いてきた。近くに人の姿はない。

「何しようっていうんですか、白薔薇さまロサ・キガンティア」

「何って？ 人気のないところに連れ出されて、不安になった？」

「お姉さまにいつも言われていますから」

人目のないところで、白薔薇さまロサ・キガンティアと二人きりになっ

たのは、たこ焼きに夢中になっているうちに境

内の人混みははるか後方。私ってば大ピンチかも。「そんなに怯えなくなつていいじゃない。別に、とつて喰おうってわけじゃないんだから」

白薔薇さまロサ・キガンティアは笑って言うけれど、油断はできない。

いつの間にか、膝丈くらいの石の柱が等間隔に並んでいる辺りまで来た。ここから先は神社の敷地ではないらしい。裏道といった感じの、さほど広くはないけど舗装された道路の端には、数台の自動車やバイクが路上駐車してある。

「これから、本当の集合場所へ移動しようっていうだけよ」

「本当の集合場所？ じゃあやっぱり、他の皆さんも来るんですか？」

てつきり、白薔薇さまロサ・キガンティアに騙されて連れ出されたと思つていたのに。

「そう。集合時間も夕方なだけだね。それまで暇だったから、祐巳ちゃんをちよつと早めに呼びだしたわけ」

「それなら……」

行くべき場所はバス停ではないだろうか。こんな裏道から、どこへ移動しようというのだろう。

ロサ・キガンティア
白薔薇さまは、コートのポケットをゴソゴソと探っている。

「あ、キャンディーならここにも」

「違う違う」

ロサ・キガンティア
白薔薇さまが取り出したのは、何かの鍵だった。何か、って。家や自転車の鍵には見えない。多分、車かオートバイの鍵だ。

「あの」

私に驚くだけの十分な時間もくれずに、ロサ・キガンティア
白薔薇さまは道端に停めてあった一台のオートバイを指差した。私の目は、そのオートバイに釘付けになる。

やたらと大きくて、ハンドルが妙に高い位置にあつて、必要以上に太いマフラーが空に向かつて伸びていて、ナンバプレートが折り曲げであつて。

どう見ても、普通のオートバイではない。この、特徴的なデザインが意味するところは……。

「えっと、あの、ロサ・キガンティア
白薔薇さま……？」

しばらく呆気にとられてオートバイを見ていた私は、ようやく我に返って背後のロサ・キガンティア
白薔薇さまを振り返る。

そして、また、絶句してしまった。

いつの間に着替えたのか、上着が先刻までのカシミヤのコートとは違っていた。ふくらはぎくらいまでの長さがあつて、裏地と背中中に派手な薔薇の刺繍がしてある白い上着。

「まさか」

私が怖れていた通り、オートバイに跨ったのはロサ・キガンティア
白薔薇さま本人であつた。当たり前のようにエンジンをかけて、派手に空吹かします。

いったいこれはどういうことですか、って質問をしようかどうしようか迷っている間に、私自身も半ば強引にロサ・キガンティア
白薔薇さまの後ろに座らされてしまった。

「はい、祐巳ちゃんはこのを持って」

ロサ・キガンティア
白薔薇さまはそう言つて、どこからともなく旗を取り出した。一メートル半くらいのポールに結

ばれた、血に染まった三輪の薔薇を描いた旗。薔薇の下には『夜魔逝璃会』なんて字が刺繍されている。

「こ、これは……」

今気が付いたんだけど、ロサ・ギガンティア白薔薇さまが着ている

「あれ」。あれは確か、特攻服っていうんじゃないやありませんでしたっけ。

ロサ・ギガンティア白薔薇さまってば、まさか……。

「さあ、しゅっぱーっ。しっかり掴まっててね」

「えーっ」

私の不安をよそに、ロサ・ギガンティア白薔薇さまの運転するオー

トバイは発車した。しかしバス通りに出る手前の赤信号を停まらずに突破。十分に私を震え上がらせてくれた。ある意味、ジェットコースターやお化け屋敷より怖い。

ドオオ……。

エンジンの振動がお腹に響く。

「いったい、いつから乗っているんですか」

「いつから、って」

右折禁止の標識を無視して交差点を突っ切りな

ロサ・ギガンティアがら、白薔薇さまは聞き返す。

「運転歴はどれくらいか、とお聞きしているんですが」

「どれくらいも何も。高等部に進学してすぐ、当時白薔薇のつぼみだったお姉さまの妹になって以来ずっとよ」

「ひっ、それって無免許なのでは？」

ロサ・ギガンティア白薔薇さまの誕生日はクリスマス、十二月二十

五日だ。高校入学当時はまだ十五歳のはず。オートバイの免許って、たしか十六歳にならないと取れないと思ったけど。

「大丈夫だって。これまで三年近く、一度も捕まらずに来られたんだから」

「捕まったら大変ですよ」

私、半分涙声になっていたかもしれない。でも、まっとうに生きてきた十六年の人生が今日で幕切れとなるかもしれないんだから、当然の反応だと思っ。

「ははははは」

対向車線にはみ出して蛇行運転しながら、ロサ・白薔

ギガンティア
薇さまは愉快そうに笑う。

「お、下ろしてください」

「死にやしないよ。だって、おみくじは二人とも

『凶』じゃなかったもん。おっと」

「ぎゃあ」

パパア　　ン！

前から来た大型トラックが、けたたましくクラクションを鳴らしながらすぐ脇を通り過ぎていく。運転手さんに向かって中指立てたりしなくていいから、地道に運転して欲しい。

「めでたしせいちょう」

とうとう私は、マリア様にお祈りを始めた。

「ははは。祐巳ちゃんは、やっぱり面白いね」

キー、キキキー。

ブオン、ブオオン。

「ぎゃー。お助けください、マリア様ー」

そんなこんなで、精神的にも肉体的にも拷問のような車に乗せられた私は、パニック状態ですっかり肝心の質問をするのを忘れていた　というより、質問する余裕なんて生まれようがなかった。

目的地はどこなのか。

それって、かなり重要な問題だったと思うんだけど。

「着いたよ」

どこをどう走ってきたのかわからない。でも、バイクは事故を起こすこともなく無事目的地に到着したらしい。知ってる限りのお祈り、何回リピートしたか知れない。

「まだ天国じゃない、……みたいですね」

少し気持ちに余裕が出てきたので、周囲を窺う。そこは、どこかの公園の駐車場のようだった。

「ここは？」

「そりゃ、今夜の集合場所でしょ」

集合場所、ということとは……。

駐車場の真ん中に、一台の車と二台のオートバイがライトをつけたまま停まっている。ということとは……。

「ごきげんよう、祐巳さん」

最初に声をかけてきたのは、令さまのオートバイの後ろに跨った由乃さん。二人ともお揃いの黄色い特効服をまとって、やっぱり『夜魔逝璃会』

の旗を掲げている。

「ずいぶん遅かったじゃないの、聖。どこで遊んでいたのかしら」

真つ赤なスポーツカー　フェアレディZか

な　の運転席に座っている紅薔薇さまは、危険な笑みを浮かべて白薔薇さまに聞いた。

深紅の特効服に身を包んだその姿は、この間祐麒に借りて読んだマンガに出てくる「天野瑞希」

とかいう女の人にそっくり。だったら令さまはアキラ、白薔薇さまは性格的に遊佐かな。なんてことをぼんやりと考えていて、ふと思いついた。

「あれ？　令さまと由乃さん……箱根に行つてたんじゃない？」

「もちろん、箱根から走ってきた」

令さまはこともなげに言うけど、箱根からここまで、何キロくらいあるんでしたっけ。それをオートバイの二人乗りで？　ちょっと待った。二人乗りのオートバイって、高速道路は走れないんじゃないあ……。

いや、そんなことはどうでもいい……わけじゃ

ないけど、それよりもっと重要な問題が目の前にあった。

駐車場に停まっているのは、三台のオートバイと一台の車。車は紅薔薇さま、ロサ・キネンシス オートバイの一台は令さまと由乃さん、もう一台は白薔薇さまと私。ロサ・キガンティア そして、残るもう一台は。

「ごきげんよう、祐巳」

マリア様のようなそのお声。するとやっぱり、オートバイの横に立つあの人影は……。

「お、お、お姉さまっ!!」

ああ、何ということでしょう。それは紛れもない、最愛のお姉さまの姿。

だけど。

だけど……。

胸にさらしを巻いた上に深紅の特攻服を羽織り、手には木刀を持っている祥子さまの姿。

それは……。

(ああ。お姉さまってば、似合います……)

違和感のなさという点では、ロサ・キネンシス 紅薔薇さまに勝るとも劣らない。格好が格好だけに、迫力は当社比

五十パーセント増しといったところ。

「祐巳は、私の後ろにお乗りなさい」

祥子さまは、私の傍へ来て言った。

「あら、祥子ってばやきもち妬き？ 密着してる」と暖かいから、このまま祐巳ちゃんを後ろに乗せておきたいなあ」

「祐巳は私の妹なのでから、私の後ろに乗るのが当然でしょう？ 温もりが欲しければ、ご自分の妹を呼べばよかったですじゃありませんか」

祥子さまがきつい口調で言う。ロサ・キガンティア 白薔薇さまに對するときはいつもこんな調子。それがちよつとしたやきもちだつてわかつているから、私にとつてはこの怒った顔はとても魅力的だ。

「あ、そういえば志摩子さんは？」

「志摩子？」

ロサ・キガンティア 白薔薇さまは一拍間をおいてから、ちよつと眉を上げて私の言葉を繰り返した。

「志摩子ねえ。あの子は誘つてない」

「どうして」

「理由はいろいろ。志摩子の家つて、何かとお客

さんが多いからね。お正月とか、家の手伝いしないといけないの。それに、あーた。あの敬虔なクリスチャンの志摩子が、こんな集会に来ると思う？ 信仰心を乱しちゃ駄目よ」

「私はいいんですかあつ!？」

「細かいこと気にしない」

「気になりますよおつ!!」

「だけど私の叫びは、鼓膜を激しく揺さぶる新たなエンジン音でかき消されてしまった。」

見ると、一台の車が駐車場に入ってくるところだ。すごい勢いで迫ってきたその車は、私たちの目の前で急ブレーキをかけてその場で一回転し、アスファルトの上に黒々とタイヤの跡を残して停まった。ゴムの焦げる嫌な匂いが鼻を刺す。

それは、やたらと長いボンネットが特徴的な外車だった。祐麒が読んでいた車の雑誌でちらっと見た記憶がある。確か、シヴォレーとかなんとか、そんな名前のアメリカ車だったはず。

ボディの色は黄色。ということは、乗っているのはあの人しかない。

「お・ま・た・せー!!」

勢いよくドアが開いて、ロサ・フェティダ黄薔薇さまが下りてきた。いつもつまらなそうにしているロサ・フェティダ黄薔薇さまな

のに、今夜はハイテンションモードだ。

ロサ・フェティダ「黄薔薇さまっ! ハワイの別荘ではっ?」

「こつちの方が楽しそうなもの」

「どうやら、ハワイへは行かなかつたらしい。よかつた。一瞬、令さまたちのように太平洋を越えてトンボ返りしてきたのかと思つた。ハイテンションなロサ・フェティダ黄薔薇さまならやりかねない。」

「さあ。メンバーも揃つたし、行きましようか」

ロサ・キネンシス「紅薔薇さまの号令で、めいめい自分の車やオートバイに乗り込む。私も祥子さまの後ろに移動した。」

それにしても知らなかつた。

伝統あるリリアン女学園の山百合会の実態が、まさか、まさか、レディースだつたなんて。

お母さんも、これは知らなかつたらうなあ。

その後のことは、あまり思い出したくないというか、頭が混乱していてよく憶えていないというか。

私は、祥子さまのオートバイの後ろに乗せられて、無我夢中でしたがみついていた。

お正月の空いた道路を、我が物顔で走り回ってけたたましくサイレンを鳴らして追ってくるパトカーを振り切ったり。

途中で見かけた、見覚えのある人物が運転するピツカピカの真つ赤なオートポンカーを取り囲み、みんなで運転手をボコつたり。……お許しください

いマリア様。この時ばかりは私も、祥子さまから木刀を借りて、進んで参加してしまいました。

ちなみに黄薔薇ロサ・フェティダさまは、その助手席にいた夕又キ顔の男の子を拉致らちつて、自分の隣りに乗せて満足そうにしている。

私は祥子さまにお願いして、オートバイを黄薔薇ロサ・フェティダさまの車の助手席側に寄せてもらった。

「どうして、あんたがここにいるのよっ!!」

エンジン音に負けないように大声で怒鳴る。祐麒も同じように怒鳴り返してきた。

「どうして、って。いやもう、俺もなにがどうなっているのか……って、祐巳こそ何やってるんだ? なんなんだよ、この怖いおねーさんたちはっ!!」

「私だつて知らないわよっ!!」

ああもう、大変な夜。

唯一、いいことがあったとすれば、それは祥子さまとずっと密着していられたことだろう。だけど、それをゆっくり楽しむ精神的余裕がなかったのが残念。

爆音とクラクションを響かせた二台の車と三台のオートバイは、いつの間にか見覚えのある風景の中を走っていた。

「何処へ行くんですか?」

「初代総長のところへ、新年の挨拶に。毎年恒例の行事なのよ」

「初代総長……って。ここ、リアンの敷地じゃ

ないですか！」

冬休みでしかも夜だというのに、何故か門は開いていて、一行はリリアン女学園の敷地へと入っていった。夜だから先生はいないだろうけど、修道院にはシスターたちがいる。こんなのシスターたちに見つかったら、大変なことになってしまう。そんな心配をしていると案の定、修道院の建物の前に立つ人影が見えた。

(ひええ……)

私は悲鳴を上げそうになったけれど、先頭を走る令さまは進路を変えようともせず、真っ直ぐにその人影へ向かって行く。

(あれは、まさか……)

「あの方が、伝説の初代総長よ」

祥子さまが教えてくれる。

伝説の初代総長、って……。

まさか、そんなバカなことが。

だってだって、あの方は……。

「……し、し、シスター上村あぁあっ!？」

叫んだ拍子に

目が覚めた。

「ゆ、夢……?」

私はぼんやりと、茶色い天井を見つめていた。まったく、なんて初夢だろう。せつかく、祥子さまのお家へ泊まりに来ているというのに。

枕の下の帆掛け船も、あまり役に立たなかったみたい。折り方が下手だったから? それとも字が汚いから?

そんなことを考えて落ち込んでいると。

「……祐巳?」

不意に、祥子さまの声がした。

「は、はいっ」

慌てて横を見ると、祥子さまはご自分の布団から出て、私の横に座っていた。

「どうしたの? うなされていたわよ。怖い夢でも見たの?」

そう言つて、私の額にそつと掌を当ててくれる。祥子さまの手は少しひんやりしていて、気持ちよかつた。

「怖いというか、何というか……」

私は口ごもつた。あんな夢、祥子さまに言えるはずがないじゃない。

ずっと遠くから、オートバイのエンジン音が聞こえている。どうやら、本物の暴走族が走っているらしい。そのせいだろうか、あんな夢を見たのは。

「ああ、あの音で目が覚めたのね。本当にうるさいわね、まったく。……シメてやるうがしら」

「えっ?」

今、祥子さまの口からなにやら物騒な台詞が漏れたような気が。

「な、何か言いました?」

「え? い、いいえ、何も。空耳ではなくて?」

白々しく微笑むその姿は、だけどやっぱりマリア様のように美しかった。

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。